

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベル5（避難）が継続＞

口永良部島では、火山活動が高まった状態が継続しています。

昨日（5月31日）及び本日（6月1日）に、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が、鹿児島県及び九州地方整備局の協力を得て上空からの観測を実施しました。31日の観測では、山頂付近は雲のため不明でしたが、新岳北西側斜面で樹木の変色域を確認しました。1日の観測では、新岳及び古岳の火口周辺の形状は、噴火前の観測（3月25日）と比較して大きな変化は認められませんでした。今後も同程度の噴火が発生する可能性があります。

噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流¹⁾に警戒してください。

火砕流の到達が予想される屋久島町口永良部島の居住地域では、厳重な警戒（避難などの対応）をしてください。

【防災上の警戒事項等】

大きな噴石の飛散及び火砕流¹⁾の流下が切迫している居住地域では、厳重な警戒（避難などの対応）をしてください。

屋久島町の避難などの指示に従ってください。

風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意してください。また、降雨時には土石流の可能性があるので注意してください。

○ 活動概況

・表面現象の状況（図1～5、図6-①⑤）

口永良部島の新岳で5月29日から継続していた噴火は、5月30日10時50分頃に雲のため確認できなくなりましたが、震動データ等から噴火は停止したと考えられます。

本村西の遠望カメラ（高感度カメラ）では、本日（6月1日）05時30分頃より、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのを確認しました。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所および屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』『基盤地図情報』『基盤地図情報(数値標高モデル)』を使用しています(承認番号:平26情使、第578号)。

昨日（5月31日）及び本日（6月1日）に、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が鹿児島県及び九州地方整備局の協力を得て上空からの観測を実施しました。31日の観測では、山頂付近は雲のため不明でしたが、新岳北西側斜面で樹木の変色域を確認しました。1日の観測では、新岳及び古岳の火口周辺の形状は、噴火前の観測（3月25日）と比較して大きな変化は認められませんでした。新岳火口内の状況は噴煙のため確認できませんでした。また、赤外熱映像装置²⁾では、新岳火口の北側及び西側斜面で熱異常域を確認しました。

・地震や微動の状況（図6-②③⑥⑦）

5月29日09時59分の爆発的噴火後に火山性地震が増加していましたが、29日13時以降は少ない状態となっています。

火山性微動は、5月29日の爆発的噴火に伴い発生して以降、観測されていません。

- 1) 火砕流とは、火山灰や岩塊、空気や水蒸気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十kmから数百km、温度は数百℃にも達することがあります。
- 2) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

国土交通省災害対策ヘリコプターはるかぜから撮影



第十管区海上保安本部ヘリコプターから撮影



図 1 口永良部島 新岳火口の状況

- ・新岳火口内の状況は噴煙のため不明でした。
- ・3月25日の観測と比較して、新岳火口周辺の形状に特段の変化は認められませんでした。

国土交通省災害対策ヘリコプターはるかぜから撮影



2015年6月1日14時23分

第十管区海上保安本部ヘリコプターから撮影



2015年3月25日11時48分

図2 口永良部島 古岳火口の状況

3月25日の観測と比較して、古岳火口の形状に特段の変化は認められませんでした。

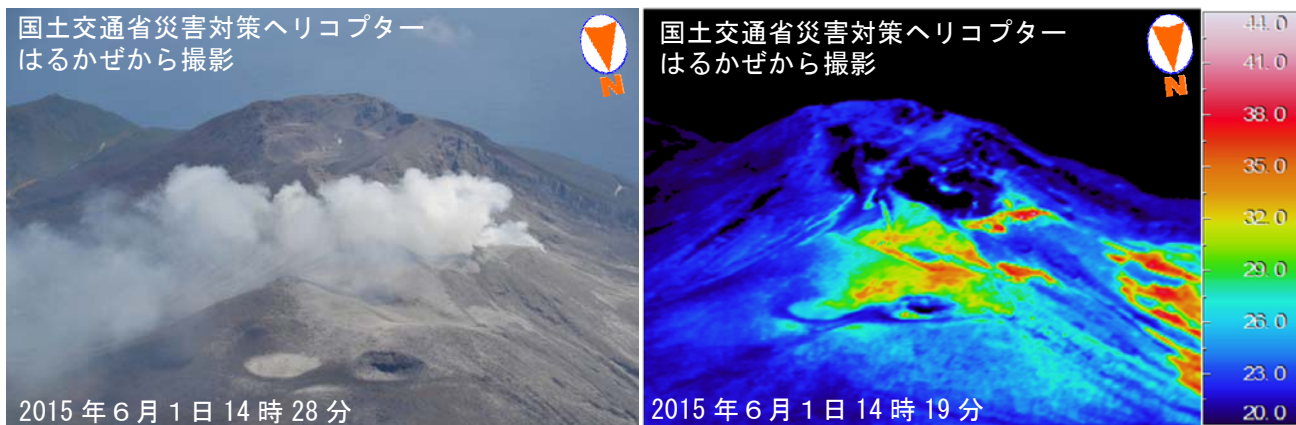


図3 口永良部島 新岳北側からの状況（6月1日）

新岳火口周辺では、火砕流の堆積物と考えられる熱異常域を確認しました。

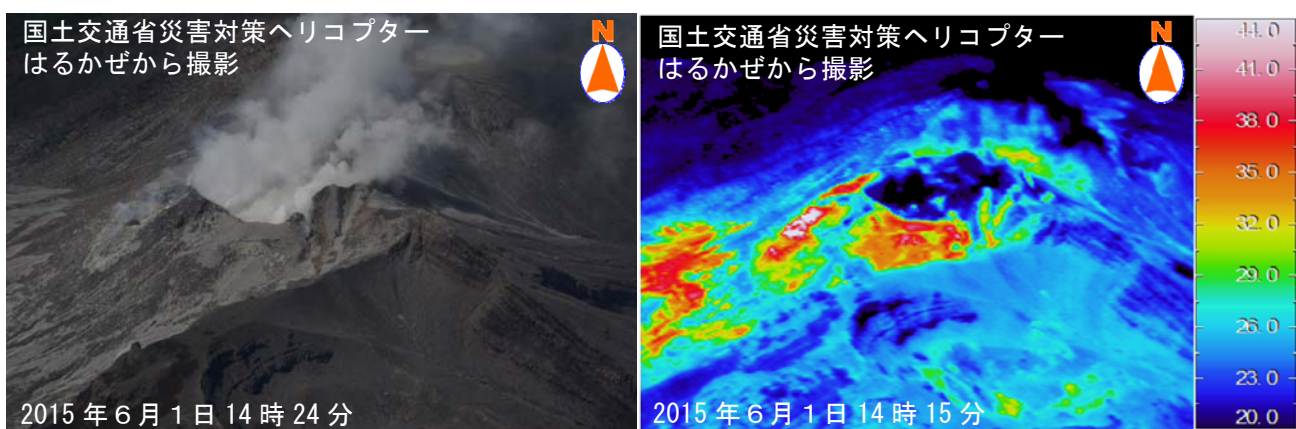


図4 口永良部島 新岳南側からの状況（6月1日）

新岳火口の西側では、火砕流の堆積物と考えられる熱異常域を確認しました。

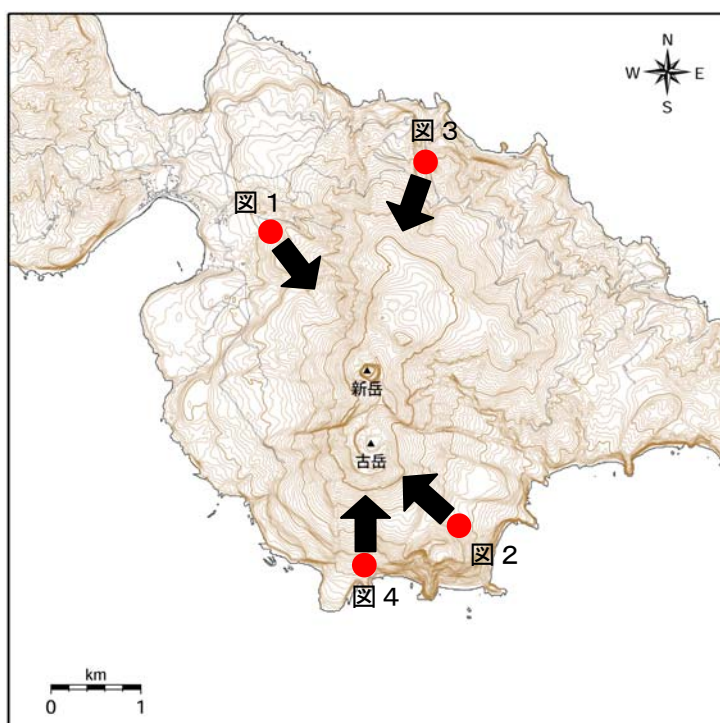


図5 口永良部島 写真撮影位置図（矢印は撮影方向を示す）

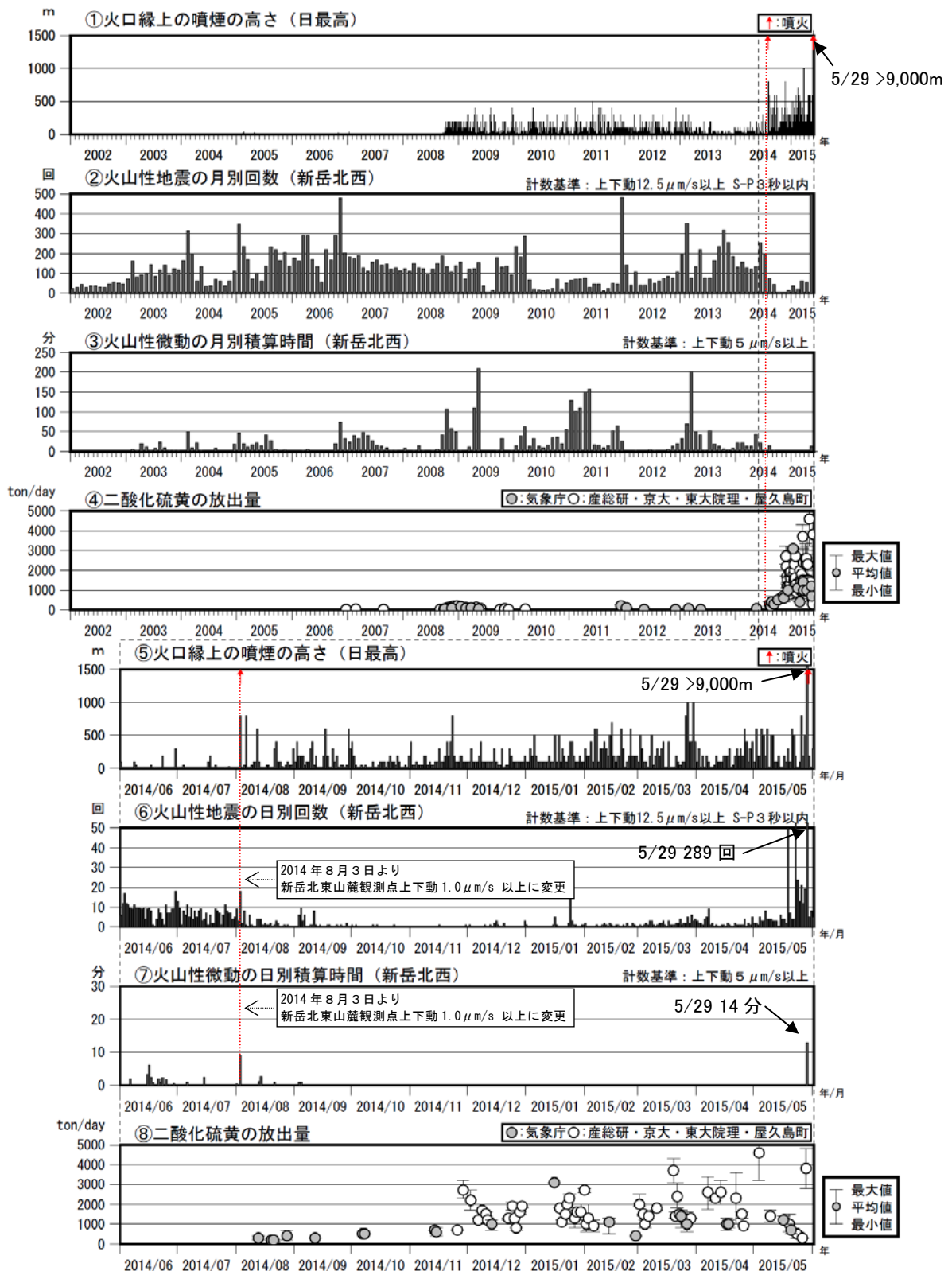


図6 口永良部島 火山活動経過図 (2002年1月～2015年6月1日19時)

- ・ 5月29日09時59分の爆発的噴火後に火山性地震が増加していましたが、29日13時以降は少ない状態となっています。
- ・ 火山性微動は、5月29日の爆発的噴火後に発生して以降、観測されていません。

※2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、噴火以降(図中赤破線後)は新岳火口から約2.3kmにある新岳北東山麓観測点で計数しており、検知力が低下しています。
 ※2015年5月23日に発生した島内のごく浅いところを震源とする地震(震度3、M2.3:暫定値)が発生したことから、監視を強化するため、5月1日にさかのぼって計数基準を見直しています。

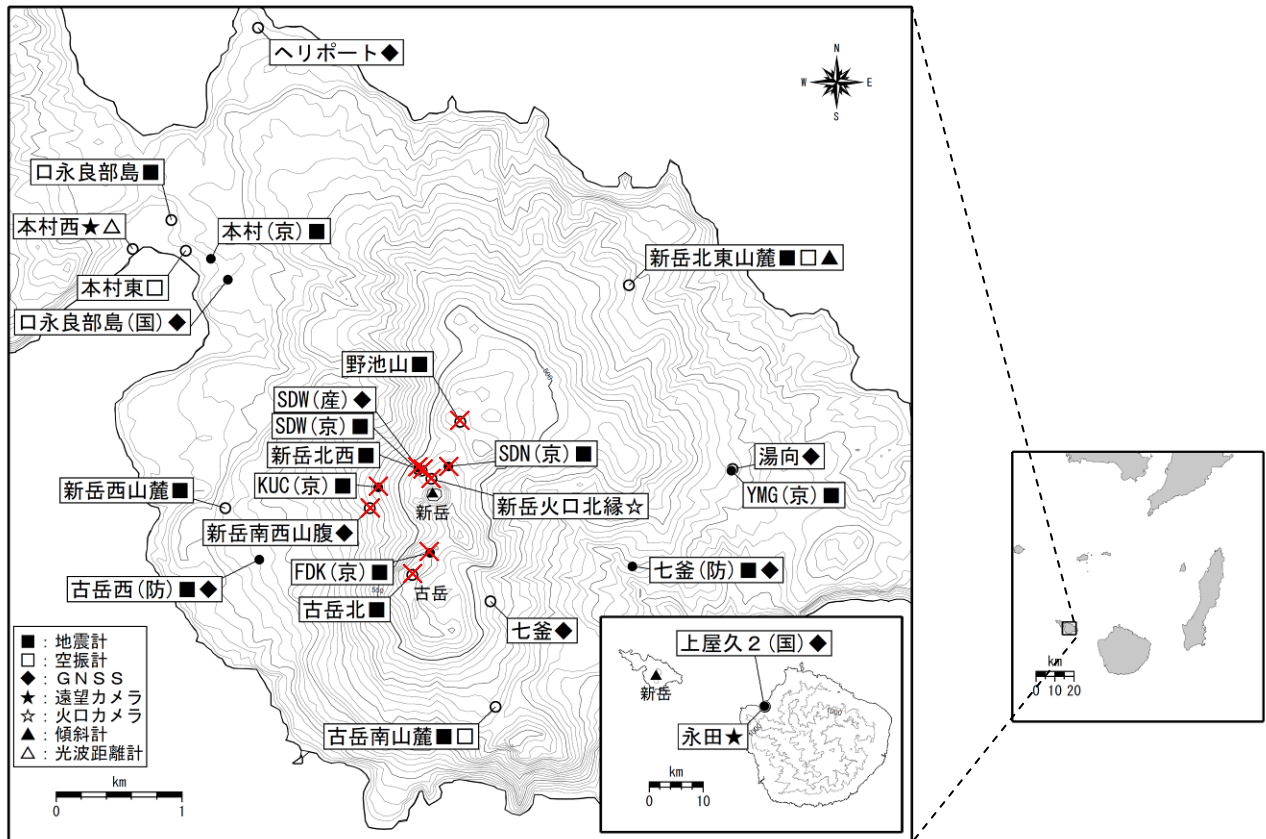


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防) 防災科学技術研究所、(産): 産業技術総合研究所
 山頂周辺の観測点 (図中赤×印) は、2014年8月3日の噴火により障害となっています。